

## ■ダムの未来像、将来に向けて

柴田氏：「人が入れない」ということも実は価値である。そこに行けば珍しい鳥が来る、虫に出会える環境がある。これが大町ダム、龍神湖の生きる道ではないか。でも時には、先ほど見た七倉ダムのデジタル掛け軸のような美しいイベントを開催してほしいと思う。

また、3つのダムが連携して災害を未然に防ぐ役割を果たしていることを住民に伝える必要がある。災害時の自助公助の考え方について、公助とは、正しい情報をタイミング良く伝えるということ。災害時には、まず公助があり、その中には住民に対する細やかな指導があり、それから自助がある。そして多くのコミュニティが再生し、互いが助け合うコミュニティが形成されるのだと思う。

鈴木氏：災害のリスクのなかでいかに生き延びていくか、ということの一つに再生可能な社会があり、持続可能な要素として、「安全」と「エネルギー」があると思う。再生可能、持続可能な社会の一つの方向性として、地方化・分散化がある。エネルギー確保は今後の日本社会において大きな課題だろう。日本の社会は、地方にダムのような構造物をつくり、都市部へエネルギーを供給する形をとっているが、このスタイルは次の時代には変わっているかもしれない。自分たちの再生可能であるエリアは地域特性で決まってくるのではない。大町ダムも電力というエネルギーをつくり出すという機能を持つ。どれだけのエリアに効率よく供給できるか、地域でつくられたエネルギーを効率よく供給できるか、供給される電力をどう使っていくかは、地域住民が一つの形をつくり、決めていかなければならない時代に入ってくると思う。そういうなかでダムは非常に重要な要素、知恵を生み出すのに重要な資産になると思う。



豊田氏：私は学生に対し、土木に携わる人は自然の中で生きさせてもらっている、そのことを心得ておけば、やることはおのずと決まってくるということをいつも話している。私は関西出身で、阪神淡路大震災を経験した。そのときに、自然の威力を身をもって体験し、災害の怖さを知った。学生に対しては、実際に現場に行き、肌で感じることの大切さを伝えている。災害の現場には、安全を確保したうえで足を運んでもらいたいと思っている。

加藤氏：長野県はかつて脱ダム宣言があった。ダムの恩恵を知らない方も多し。ダムの雄大さ、治水の大切さを含め、今回を契機に改めて広く伝えていくべきだと考える。

牛越氏：大町市はダムが市街地から見えるまちである。龍神湖、高瀬溪谷とも、市民が親しんでいる場である。大町市にとってダムの価値とは何かを考えると、大町市は信濃川水系の一番上流部にあるまちとして、「水の大切さ、保全を伝えるもの」だと思う。信濃川水系の最上流のまち、その責務として、水の大切さをもう一度思い返していきたい。

